

「安息日に水腫の人を癒やす」

2023年08月25日

イエスは、律法の専門家たちやファリサイ派の人々に言われた。「安息日に病気を治すことは許されているか、いないか。」彼らは黙っていた。すると、イエスはその人を引き寄せ、病気を癒やしてお帰しになった。そして、言われた。「あなたがたの中に、自分の息子が牛が井戸に落ちたら、安息日だからとって、すぐに引き上げてやらない者がいるだろうか。」彼らは、これに対して答えることができなかった。(ルカ14:3~6)

安息日に、主イエスはファリサイ派のある議員から食事に招かれ、議員の家に入られた。ファリサイ派の人々は、主イエスは律法を遵守しないと激しい反感、敵意を持っていた。招いた人はファリサイ派に属し、71名で構成されるイスラエル最高法院の議員の一人で、宗教的に権威を持ち、高い地位にあった人である。その人から食事に招かれた。主イエスは招かれれば、どこにでも応じておられた。ファリサイ派の議員は、主イエスに敬意を持ってではなく、貶めようとして、招きを企んだのである。集まっていた人々は主イエスの様子を注視していた。その時、主イエスの前に水腫を患っている人がいた。議員が設定した状況である。水腫とは、体の色々な皮下組織に、異常な組織液が溜まり、腫れ上がって、生活に困難を伴う病である。胸水、腹水などがある。主イエスはその人を見て、彼らに、「安息日に病気を治すことは許されているか、いないか」と問われた。安息日に禁じられている病を癒やす労働をするか、しないかを試すために招かれたことを見抜いて、あえて問われたのである。彼らは問いに答えず、無言であった。すると、主イエスは、病人を引き寄せ、病気を癒やされ、帰された。何の労働もしてはならない日に、水腫の病から解放したのである。主イエスは病を癒やす権能を神から授かっていたという著者ルカの信仰告白である。そして、「あなたがたの中に、自分の息子が牛が井戸に落ちたら、安息日だからとって、すぐに引き上げてやらない者がいるだろうか」と言われた。安息日であっても、息子が牛が命の危険に襲われた時は、救いの手を差し伸べるではないか。彼らは、この言葉に対しても、返答することができないでいた。

福音書には、安息日論争はしばしば記されている。今日の私どもからは、理解できない空疎な論争に見えるが、当時は、大問題として捉えられていた。

安息日の戒めは、モーセの十戒の第四戒に規定されている。「安息日を覚えて、これを聖別しなさい。六日間は働いて、あなたのすべての仕事をしなさい。しかし、七日目はあなたの神、主の安息日であるから、どのような仕事もしてはならない。あなたも、息子も娘も、男女の奴隷も、家畜も、町の中にいるあなたの寄留者も同様である。(出エジプト20:8~10)」この戒めは人を生かす知恵深い戒めである。人間は休みなく働くと、自分が見えなくなり、悲惨な過労死を生んでいく。6日は働いて、7日目は、神に礼拝を捧げ、安息とする。礼拝で神の言葉を聞き、魂を回復させ、体も休養する。自分自身を確認し、歩むべき方向を指し示されていく大事な安息なのである。イスラエルでは、この安息を、家族だけでなく、奴隷や寄留者などの弱い立場にある人々、更に、家畜までも安息させなさいと規定し、神を畏れるイスラエル人の倫理観を示している。

ところが、ファリサイ派の人々は、この戒めを遵守することのみを強調し、守らない者を厳しく咎め、そのことによって、自らの宗教的権威としたのである。生きている人間を無視し、戒めが一人歩きして、苦しむ者を顧みなかった。主イエスは、戒めは人間を縛るものではなく、生かすものであることを、公然と示されたのである。